

省エネの先には！ 環境研究者・高瀬幸造

朝倉幸子◎TH-1
illustration:Taco

■環境が建築へ導く

高瀬幸造さんは1983年生まれで、東京大学を卒業し、2012年には同大学大学院で博士（工学）を取得したことから、秀才といえよう。建築を選んだのには、出身である横浜市泉区の緑園都市での生活が大きな意味をもつという。同地域は、原広司先生設計の文化会館や、山本理顕さん設計の有名な建築が点在するエリア。そういった環境で育った高瀬さんにとっては、建築が身近な存在だったようです。

現在は、建築環境分野の研究者である高瀬さん。環境分野へ進んだ理由を聞くと「意匠の設計課題が好きではなかったのもありますが…」と笑いながら語りつつも、学生時代に難波和彦先生の講義で聞いた「これからは環境が重要だよ」という言葉や、箱の家シリーズの実測調査を手伝ったことがきっかけで志したという。つくづく難波和彦先生の「環境論」は学生への影響が強かった。東大在学中は、前真之先生の研究室に所属した高瀬さんなのでした。

現職である東京理科大学で教鞭をとることになったのは、井上隆先生との出会いがきっかけとか。井上先生が審査委員長をしたコンペに参加したときに声をかけてもらい、助教・講師と肩書は変わりつつも、6年程度の時間を井上先生の下で過ごしたのです。その間にも第7回サステナブル住宅賞（2017年）で国土交通大臣賞を受賞するなど活躍してきた。そして、2024年に東京理科大学創城理工学部建築学科准教授となり、研究室の活動はいよいよ幅を広げている。

■研究主体でかつ実働

組織設計事務所に行った仲間を講師に招くなど、大学時代の交流は現在でも続く。明治大学准教授の川島範久さんも学生時代からの付き合いで、それぞれの得意分野を合流させる。主軸は研究活動だが、

設計実務にかかわることも。実際に1980年代生まれの増田信吾さんや大坪克亘さん、中川エリカさんなど、同世代の建築家との協働した作品がメディアに取り上げられることも多い。住宅・非住宅に限らず、設備性能向上だけを考えるのではない。周辺環境との調和や建築デザインとの関係性を考慮した環境性能を提案ができることが高瀬さんの強みなのだ。ただ、タイミングが遅いと感じるときもあり、設計がある程度決まった段階で相談を受けてもやれることが少ない。プロジェクトの初期段階で参画できれば、省エネ化だけでなく、建築の価値向上に与えるインパクトは大きくなると思うという。多様化する発注者の意向も汲みながら、的確なアドバイスができる高瀬さんの存在は今後さらに建築家には頼りになるのだろう。

多くの実作品にかかわる高瀬さんだが、個人事務所を構えているわけではない。研究者として実プロジェクトに携わりながら、そこで得られた知見やデータを研究にフィードバックしていくことが重要だと考える。現在の研究室は大所帯で卒論の時期などは多忙になるが、多くの学生を抱えるからこそできる研究もあるという。省エネの議論がひと段落した感じがある昨今において、利用者の快適性や災害に備える環境づくりなど、視点を広げた研究に取り組んでいきたいとも。

「趣味は子供達と遊ぶことかな」と微笑む高瀬さん。妻の故郷である熊本に行くと、豊かな自然の中にセルフビルドで家を建てたいという夢も描けてくる。その家で高校時代から打ち込んだギターをかき鳴らす日も遠くなさそうだが、子供の成長は待てくれないから遊んでもらえるうちに実現あるのみかもしれない。

